
《論文》

曹禺『雷雨』のテキスト変遷について

瀬戸 宏

要旨

1934年に発表された曹禺『雷雨』は、中国話劇成熟の指標となる作品であり、上演回数も話劇史上随一である。文学的にも中国現代文学を代表する作品の一つである。『雷雨』は、中華民国期からすでに微細な修正があった。中華人民共和国建国後には当時の時代思潮の影響で何度かかなり大きな修正があった。『雷雨』テキストは次のように大別される。

- I、文化生活出版社版単行本版（1936年1月初版）。
- II、開明書店版『曹禺選集』収録版（1951年8月初版）。
- III、人民文学出版社『曹禺劇本選』収録版（1954年6月初版）。
- IV、中国戯劇出版社第二版単行本版（1959年9月第2版）。

この各系統の中でも、細部の相違がある。Iは現在の『雷雨』の定本となっているテキストである。Iと他のテキストを区別する最も大きな相違は、序幕・尾声の有無である。IIは中華人民共和国建国直後の思想状況の影響を受けて“階級闘争”を強調し、別の作品のような大幅な書き換えをおこなったテキストである。IIIはIIの誤りを認めて基本的にIの形態に戻したものである。ただし序幕・尾声はない。IVは上演台本に使えるように、IIIを圧縮したものである。本論では、IからIVまでのテキスト変遷の内容と改訂をおこなった曹禺の思想状況を分析し、最後にIに復帰する過程を考察した。

曹禺が1934年に発表した『雷雨』が中国話劇成熟の指標となる作品であり、上演回数も話劇史上随一であること、文学的にも中国現代文学を代表する作品の一つであることは、すでに多くの

人から指摘されている。

記述の都合上、現在定本とされている『曹禺全集』¹収録テキストに基づき、『雷雨』の内容について確認しておきたい。

『雷雨』は、一九二二年頃天津の封建遺制が色濃く残る資本家家庭で起こった事件を描いている。ある夏の日の午前中から翌日の午前二時頃までの二四時間に満たない時間の中で、筋の進行につれて隠されていた資本家の家庭の秘密が暴露されていき、最後に物語が炸裂するかのよう三人の若者が衝撃的な死をとげ、二人の女性が廃人となる悲劇が激しい感情のほとぼしりの中で描かれる。現在の定本では一〇年後のある冬の日に事件を回想する序幕・尾声がついているが、ほとんど上演されない。

『雷雨』は、民国期からすでに微細な修正があり、中華人民共和国建国後には当時の時代思潮の影響で何度かかなり大きな修正があった。『雷雨』修正については、廖立、吉田幸夫、祝宇紅などの先行研究がある²が、発表時の時代的制約や結論への疑問などが感じられる。本稿では、先行研究を踏まえつつ、修正の背景などこの問題をより深く研究したい。『雷雨』テキストを私の考えに基づき大別すると次のようになる。これは、吉田幸夫の分類とほぼ同一である。

- I、文化生活出版社版単行本（一九三六年一月）。
- II、開明書店版『曹禺選集』収録テキスト（一九五一年八月初版）。
- III、人民文学出版社『曹禺劇本選』収録版（一九五四年六月初版）。
- IV、中国戯劇出版社第二版単行本テキスト（一九五九年九月第二版）。

以下、各テキストの内容と出版事情を検討することにしよう。

一

- I、文化生活出版社版単行本テキスト（一九三六年一月、以下文化版と略記）。

『雷雨』初出は、巴金編集の文学雑誌『文学季刊』第一卷第三期（一九三四年七月）であった。二段組みで同誌一六一ページから二四四ページまで八〇ページ以上を占めていた。四幕劇と副題が附されている。実際には序幕と尾声があり、厳密には四幕ではない。原稿を読んだ巴金は内容に感動し、一挙掲載を決定したのである³。

曹禺によれば、発表後しばらくは特に反響はなかった⁴が、同年一二月に浙江省上虞の春暉中学学生が上演した。これが初演とされている。その後一九三五年四月二七日から二九日、中国人日本留学生の団体・中華話劇同好会が東京・一橋講堂で上演するなど、しだいに『雷雨』の名声は高まっていった。そして『文学季刊』での発表から約一年半たった一九三六年一月に、文化生活出版社から単行本が刊行されたのである。同社刊の文学叢刊の一冊であった。

この単行本には、かなり長い序が附されていた。序は「現在、三年前の執筆の光景を思い起こすと、私ほうそで自己の見地をひけらかすべきではないと思う。私は、自分が何かを正し、風刺し、攻撃しようと明確に意識したことはない」⁵（全1p7）と述べ、作品の政治功利性を否定していた。

文化生活出版社は一九三五年五月に巴金らによって上海で創立された出版社で、当初は文化生

活社という名称で、同年九月以降文化生活出版社となった。呉朗西が経理（社長）、巴金が総編輯（編集長）であった。文化生活出版社は蕭軍、蕭紅、何其芳ら一九三〇年代に頭角を現した作家の作品を多数出版し、中国現代文学史上で重要な位置を占める。曹禺の人民共和国建国以前の作品はすべて文化生活出版社から出版されており、曹禺にとっても重要な出版社であった。抗日戦争中は、桂林、重慶などを転々とし、抗日戦争勝利後上海に戻った。一九五五年、民間企業の公私合営化推進の中で上海新文芸出版社（現、上海文芸出版社）に吸収された⁶。

『文学季刊』版と文化版は基本的に同一だが、微細な相違もかなり多い。多くは単純な誤植や作者ミス訂正の類である。たとえば、『文学季刊』版人物表では魯大海は二十歳だが、文化版では二七歳になっている。魯大海は事件の約三〇年前の光緒二〇年除夕（旧暦大晦日）に生まれて三日で母親の侍萍と共に周家を追い出されるが、周萍とは一つ違いの設定である。二〇歳では明らかに作品の設定と合わない。

このほか、第一幕の周冲の台詞「哥哥是专门矿科的。」が、文化版では「哥哥是专门学矿科的。」⁷となっている、第一幕で侍萍が北平からやってくる⁸という台詞が、文化版では他の場面と同様に済南に訂正されている、などである。

だが、内容に関わる変更もある。『文学季刊』の初出で、魯大海は冒頭の人物表で煤鉱工頭とされ、本文（台詞）でも工頭が多く用いられている。しかし文化版の人物表では煤鉱工人となっている。また、『文学季刊』版では第三幕で雷雨の中蘩漪が窓の外から周萍、四鳳を見つめる印象深いト書きがなく（外で女のため息の声、窓をたたく）⁹となっているだけである。第四幕で蘩漪が周萍に自分から窓の外にいたと語るのは、文化版と同じである。

工頭については、実は文化版でも八版までの人物表は工頭で、本文（台詞）も工頭であった。しかし一九三七年五月の奥付がある第九版の文化版人物表は工人で、本文も相当数が工人になっている¹⁰。これ以降の版も同様である。工頭は工人（労働者）を現場で束ね監督する職務で、労働者に属すると同時に末端管理職として企業側の手先になることもあった。そのため、魯大海の労働組合指導者としての階級性を明確化させるため、工頭を工人に改めたのであろう。ただし第九版以降の文化版でも魯大海を工頭とする台詞は第二幕に残っている¹¹ので、根本的な変更があったとは言えない。第九版以降の文化版では、文学叢刊ではなく曹禺戯劇集一となっている。これは、一九三六年十一月に第二作『日の出』が出版され、第三作『原野』も一九三七年『文叢』第二期から連載が始まったので、一九三七年五月からは曹禺戯劇集とし、この機会に工頭を工人に改めたのであろう¹²。

この第八版から第九版への修正は、第九版以降も修正が明記されず版数もそのまま引き継いだので長い間注意されず、今日では第九版以降の修正版が文化版とみなされている。『文学季刊』版から文化版（初版）へ、さらに文化版（第九版）への変更は、発表段階での試行錯誤の表れであり、文化版（第九版）を創作の一つの終点と考えてよいであろう。廖立は『文学季刊』版と文化版を別種の版本とみなし『雷雨』版本を五種類としているが、『文学季刊』版と文化版の相違は多くがミスの訂正など微細なもので、序幕・尾声の存在など共通性の方が多い。『文学季刊』版の忠実な出版はこれまで存在せず、筆者は『文学季刊』版を独立した版本とみなす必要はないと考え

る。

第五節で詳述するが、一九八八年に中国戯劇出版社から『曹禺文集』が刊行される際、曹禺は文化版を底本とすることに同意した。これ以後、文化版が『雷雨』の定本になる。一九九六年曹禺逝去の直前に彼の同意を得て花山文芸出版社から『曹禺全集』全七巻が刊行され、『雷雨』は第一巻に収録された。本論では以下全集版と呼ぶ。後述のように文化版と全集版の間にも微細な差異があるのだが、以上を整理すると、文化版は次のように分類できよう。

- I a、『文学季刊』一卷三期掲載版（一九三四年）
- I b、文化生活出版社文学叢刊版『雷雨』（第一版～第八版、一九三六年）
- I c、文化生活出版社曹禺戯劇集『雷雨』（第九版以降、一九三七年）
- I d、中国戯劇出版社版『曹禺文集』収録『雷雨』（一九八八年）

二

II、開明書店版『曹禺選集』収録テキスト（一九五一年八月初版、以下開明版と略記）。

序幕・尾声を削除し、第二、四幕を中心に階級闘争を強調するなど文化版と比べて大きな変更がある。この変更は、その後の曹禺の歩みとも大きく関わるので、変更前後の曹禺の情況などをやや詳しくみることにする。

曹禺は青年時代から漠然と社会の暗黒面への強い憤怒があり、そのため中華人民共和国建国以前から重慶などで次第に中国共産党と接触を深めていた。中華人民共和国建国直前に解放区（共産党支配地区）に移り、一九四九年七月二日から一七日まで、当時の主要な作家、藝術家を網羅した中華全国文学芸術工作者代表大会（第一次文代会）に参加した。第一次文代会で曹禺は「私の大会に対する意見」という発言をし、その中で次のように述べている。

「私たちは毛沢東思想の指導と新民主主義の旗のもとで団結してきた。これが私たちの原則である。

今後の文芸批評と文芸活動は、必ずこの原則に基づいて発展しなければならない。私たちは毛沢東思想を努めて学習し、新民主主義と今後の文芸路線の関係を研究し、認識しなければならない。思想上から自己を改造し、原則に基づいて文芸の力を発揮し、労農兵に奉仕し、新中国の文化建設のために奉仕する。これが、私たちすべてが応えなければならない課題である。」¹³

文学芸術の功利性を認める発言で、一九三六年の『雷雨』序とは大きく立場が変化していることが理解できる。一九四九年七月の曹禺は、すでに共産党の文芸政策を支持し積極的に実践していたのである。まだ人民共和国建国以前だが、すでに南京、上海は解放され中国革命成功はもはや明らかだった。革命勝利という圧倒的事実が曹禺の背景にあったのか。曹禺は文代会に続いて文学、戯劇、電影各協会成立大会に参加し、それぞれ全国文連常務委員、全国文学工作者協会（現、中国作家協会）常務委員、全国戯劇工作者協会（現、中国戯劇家協会）常務委員などの役職に選出された。十月一日には天安門に登り、開国大典に参加している。共産党政権から重用されていることがわかる。

十月には魯迅芸術文学院、華北大学芸術系、国立戯劇専科学校を統合して国立戯劇学院が成立

し、曹禺は副院長となった。翌年四月には国立戯劇学院は中央戯劇学院となったが、曹禺の副院長の地位は変わらなかった。注目されるのは、一九五〇年一〇月に「今後の創作についての初歩的な認識」¹⁴を『文芸報』三巻一期に発表しこれまでの創作態度を全面的に自己批判したことがある。曹禺は、「今後の創作についての初歩的な認識」の中でまず「私の作品は大衆に良い影響があったか。本当に若干の進歩を引き起こすことができる作品か」と問いかけた後、次のように述べていた。

「これはそうとは言えない。『雷雨』は反封建の役割がいささかあるそうだ。正直に言うと、私は反封建の意義を実にあまり理解していなかった。私は個人の好悪で、主観的な臆断で現実に注釈を付け、解釈をする仕事をした。これは十分に作者の無知といい加減さ、大衆に責任を負うことがいかに重要かがわかっていなかったことを示している。史的唯物論の基礎がなく、祖国の革命の原動力を明らかにせず、社会の階級的性質を分析せず、しかるにいわゆる“正義感”を自己の思想の支柱としたのである。」¹⁵

曹禺はこのように建国以前の創作態度をほぼ全面的に否定し、さらにこう述べた。

「これはもとより非常に幼稚で、非常にこっけいである。しかし一人の作家の誤った見方の害毒の甚だしきは自分だけでなく、この劇の百回千回の上演を観た観客にまで拡大し広がっていくことにある。最も心を痛めるのは、このことである。」¹⁶

自己の民国期の作品は、人民にまで害毒を流した、と認めたのである。

曹禺が一九五一年八月開明書店から“新文学選集”の一冊として『曹禺選集』を刊行したのは、このような思想状況の中であった。開明書店版『曹禺選集』収録『雷雨』について検討する前に、開明書店と“新文学選集”について確認しておこう。

開明書店は一九二六年商務印書館から一部の編集者が分離して創立された出版社である。その出版内容は語文教科書、語文参考書、『中学生』など学生向け雑誌類と新文学関係書籍の二種類に大別された。新文学書では、茅盾『子夜』、巴金『家』、葉聖陶『倪煥之』など民国期中国現代文学の重要作品を出版している。一九五三年に青年出版社と合併し、中国青年出版社となった¹⁷。

開明書店は一九五一年八月に“新文学選集”を刊行した。解放区の商品を中心とした人民文学出版社“人民文学叢書”と並ぶ建国初期の大型文学叢書である。第一輯と第二輯に分かれ、第一輯は建国時点で逝去していた作家が収録され、第二輯は建国時点で健在の作家である。第一輯には、魯迅（上中下）、瞿秋白（実際には未刊行）、郁達夫、聞一多、朱自清、許地山、蔣光慈、魯彦、柔石、胡也頻、洪靈菲、殷夫が収録され、第二輯には、郭沫若（上下）、茅盾、葉聖陶、丁玲、田漢、巴金、老舍、洪深、艾青、張天翼、曹禺、趙樹理が収録された¹⁸。魯迅、郭沫若以外は一人一冊で、第二輯は基本的に作家の自選であった。中国新文学（現代文学）の骨格を具体的な作家、作品で示したもので、一九七九年頃までの中国現代文学に対する基本認識を形成する役割を果たしたと言ってよい。

開明書店版『曹禺選集』には、『雷雨』『日出』『北京人』が収録された。これ以後一九八〇年代に『原野』が再評価されるまで、この三作が一般に曹禺の代表作とされ、これ以降に出版された

曹禺作品集も、この三作を収録するのが常であった。曹禺はこの三作に対して、大幅に手を加えた。開明書店版『曹禺選集』には序がついており、改定に対する曹禺の姿勢を知ることができる。曹禺は、まず『雷雨』などが歓迎された理由をこう述べる。

「長きにわたって鞭を振り上げた主人たちは、奴隷たちを何も言わない動物に変えることができないのを恨んで、いつも黙々と鞭を振っていた。もし奴隷の中の誰かが一声『俺たちは人間だ、おまえたちこそ動物だ』と叫んだら、恨み重なる奴隷たちは聞くとすぐに『この声は私たちのものだ』と感じた。だから、反動の統治のもとで、芸術形象を用いて、圧迫されている者の旧社会への憎悪を一面的であろうと表現し、彼等の統治者への憤怒をあまり深くはなくても言おうとしたなら、圧迫されている者たちは双手をあげて歓迎し、さらにはその中の浅薄さや過失を見逃してくれるだろう。この幾つかの戯曲が当時観客の肯定を得たその原因はここにある。」¹⁹

不十分ではあっても被圧迫者の声を作品が代弁していたからこそ、作品は歓迎されたと曹禺はみなすのである。だが、曹禺は今ではそれでは不十分だと考える。

「しかし後にそれらを読むと、その中の幾つかの部分は理にかなっていないと思った。いま思うに、始めた時は確かに幾つかの問題を提出し、幾つかの道理を説明しようと試みたと記憶している。しかし、私はついに幾らかの激動の気持ちで書いたけれども、書いている時は根本を追求せず、これらの罪悪を為している基本的な根源をはっきりとは言わなかった。」²⁰

そして曹禺は改訂の理由をこう述べる。

「だから、今回増刷にあたって、私はこの機会を借りていくつかなの変更を行った。しかし改訂は手間のかかることで、用いた気力は別の戯曲の一つ書くのにも劣らなかった。(中略) ‘少し手を入れた’ 結果は、おそらくつぎはぎの痕跡が示されているだろうが、元のものに比べて真実に近いだろう。もし改訂の後、今日の読者と観客にいささかの有益な効果を生むことができれば、とても嬉しく安心するのである。」²¹

それでは、改訂された『雷雨』はどのようなものになっただろうか。開明版『雷雨』の特徴は、次の点にある。

まず、序幕、尾声の削除である。また、第一幕から第三幕まで台詞がかなり削除されト書きも簡略化されている。文化版第二幕で魯大海を裏切ってスト終結させた魯大海以外の労働者代表は、開明版では逮捕され、スト解除協定に署名するのは会社側が炭鉱で別に選ばせた代表になっている。第四幕は全面的に書き直され、鉱山はイギリスの合弁会社になり、周樸園とイギリス資本を結びつける喬参議という文化版にない人物が登場している。開明版第四幕の内容をあらすじ風にまとめると、次のようになる。

深夜一時、周樸園と周萍の対話から始まる。周萍は夜汽車で炭鉱に向かうことを告げる。周萍が出発しようとする時、繁漪が登場し、周萍を罵り、四鳳と侍萍を呼び寄せる。侍萍は周樸園と周萍を罵り、自分は侍萍だと自ら名乗った。四鳳は憎々しげに周樸園と周萍をにらみ、魯大海を捜して退場する。繁漪も、おまえたち二人がどんな死に方をするか見届けたい、と言い残して退場する。周萍は、力なくソファに座り込む。そこへ喬参議がかけつけ、鉱山からの長距離電話で、ストは拡大しまるで暴動だ、ほかの労働者も騒ぎ出した、と告げて劇は終わる。

文化版では、絶望した四鳳は自殺するが、開明版では四鳳は死なず、侍萍と共に闘争のため魯大海を捜して退場する。文化版第四幕の周萍と魯大海の対話は削除され、開明版第四幕では魯大海は台詞で説明されるだけで登場しない。周冲、魯貴も登場しない。魯大海は人物表でも工人であるが、魯大海を工頭とする台詞は残されている²²。周萍は自殺せず、事態の進展になすすべなくうなだれているだけである。最後は、労働運動の拡大が周樸園に知らされ、周樸園は鉞山も家庭も支配できない敗北者となって終わっている。労働者階級が勝利する「歴史の必然」²³を明らかにするためであった。

序幕・尾声については、すでに一九三〇年代に周揚が『雷雨』と『日の出』を論ず一併して黄芝岡氏の批評への批評²⁴の中で批判していた。周揚は曹禺『雷雨』の成功を「リアリズムの成功」²⁵であるとした上で、序幕・尾声は「彼ら（観客）に旧勢力の必然的な崩壊の歴史的遠景を示す」²⁶ことを弱める役割を果たすと指摘した。尾声の周樸園は年齢が加わり老いをみせてはいるが、依然として資産家であることが示唆されている。『雷雨』事件により、劇中の同情されるべき人物は死亡したり狂人となったりして破滅したにもかかわらず、「罪悪の根源」²⁷である周樸園はその社会的地位に壊滅的な打撃を受けず、精神にも異常をきたさなかったのである。さらに、少女と少年の会話を通して事件を十年前のこととしたのは、観客が目にした罪悪に驚き「すべてを揺るがせる雷雨よ来たれ！」²⁸と叫ばせるのではなく、劇の内容を過去のことにして「観客の情緒をゆったりと平静な境地に引き込」²⁹んでしまうものなのである。

周揚のこの批評はもともと黄芝岡の粗暴な批評への反論として書かれたもので、一定の説得力をもって『雷雨』の主題を「反封建家庭」とし、その後の『雷雨』受容史に大きな影響を与えた。そして、曹禺は周揚の『雷雨』に対する批判を受け入れたのである。

人民共和建国直後に作品の語句を改めたり一部を削除したりするなどの訂正は、他の作家にもみられる。たとえば、茅盾は『子夜』の“共匪”という語句を“共産党”に改めている³⁰。老舍は『駱駝祥子』一九五五年人民文学出版社版で二三章後半以降と“革命者”阮明に関する部分を削り、葉聖陶も『倪煥之』二五章以降を削った。しかし、曹禺のように別の作品と言っているような変更を行なった例は、他の作家にはない。

曹禺はなぜこのような修正をおこなったのだろうか。当時の情勢による社会的理由としては、知識分子の思想改造や建国直後の中国共産党の権威、共産党への信頼による労働者性強調があるだろう。また個人的理由として、曹禺の小心な性格、外部の批判に過度に反応、新体制への期待または迎合もあるだろう。

重要なことは、曹禺はこの改訂は完全に自発的なものだと述べていることである。労働者・農民と思想を一体化させることが知識人の革命参加であると信じられていた時代においては、労働者・農民を代表するとされた時の政権の意向に沿って歩む道を選択することも、大衆の中に入り自己を成長させようとする決意の表れであった。一九五五年の胡風批判の際、曹禺のこの改訂を共産党官僚の文芸界への介入とした胡風に対して、曹禺は次のように事情を説明して反論した。

「私がここで胡風に言いたいのは、私は誰かの理論の脅しを受けて改訂を思い立ったのではないことである。逆に、改訂の時、周揚同志は私が改訂しようとするのを聞いて、一度ならず誠実に

私に改めずに、やはりもとのままで保存するよう勧めたことを記憶している。私は考慮しなかった。その時私は、改訂は私のことであり、私が認識したとおりに改訂しようと思った。改訂した後、改訂原稿を編集者が見て、彼等もこのように改訂するのに賛成せず、やはり元の通りに出稿していいか尋ねた。私はやはり賛成しなかった。この改訂本は最後に私が私個人の意見を堅持したことにより、出版された。」³¹

鄭成「建国初期における青年知識人の社会主義への思想転向」³²によれば、建国以後の知識人に対する思想改造は、一九五二年に開始する。曹禺の「今後の創作についての初歩的な認識」や『雷雨』改訂は、それよりも一、二年早い。鄭成論文によれば、思想改造の中で自己批判した学者の中には過度の自己卑下で学生から軽蔑された者もいたというが、曹禺はそのようなことはなかったようだ。この事実は、曹禺自身が言うように『雷雨』改訂は自発的な行為であることを裏付けているようにも思われる。曹禺研究者の田本相は「曹禺は、国民党統治区から来た作家の中で、最も早く自分を反省した作家である。いかなる外界の圧力もなく、いかなる外力の督促もなく、彼は主体的に旧作に自己批判をおこなったのである」³³と述べている。これは事実かもしれない。

三

Ⅲ、人民文学出版社『曹禺劇本選』収録テキスト（一九五四年六月初版、以下劇本選版と略記）。基本内容を文化生活出版社版に戻す。

開明版『雷雨』の生命は短かった。一九五四年六月、人民文学出版社から『曹禺劇本選』が出版された。やはり『雷雨』『日出』『北京人』が収録されたが、どの作品も、基本的に民国期のテキストに戻されたのである。『曹禺劇本選』には一九五四年三月の日付の前書きがついていたが、開明書店『曹禺選集』に比べてずっと短い。

「数年前、私は『雷雨』『日出』『北京人』という三本のかなり観客に知られた戯曲を、改訂して出版した。この作品集では、やはりこの三作の劇を選んだ。しかし今回は、いくらか文字の整理をしたほかは、大きな改訂はない。いまからみると、やはりもとの姿を保ったほうがいい。だから、ここで提案するが、もし今後この幾つかの劇を上演する人がまだいれば、この本を使うことを希望する。」³⁴

ここでは、『雷雨』に限定して述べる。基本内容は文化版に戻ったが、序幕・尾声は復活しなかった。一九五〇年代の時代思潮では、“階級闘争”の視点を弱める序幕・尾声は、やはり認められがたかったのであろう。その他にも文化版と比べても、微細な変更がある。副題は（四幕劇）となっている。文化版では、魯大海が周萍に、これは炭鉱で拾ったものだ、と言ってピストルを渡していた。開明版では、ピストルについての内容はない。劇本選版では、周樸園から護身用にとピストルを渡される。第四幕すなわち戯曲全体は、銃声を聞いた周樸園と蘩漪が共に周萍が自殺した書齋に駆け込む場面で終わっている。

なぜ曹禺は、わずか三年で開明版を放棄したのだろうか。中国は一九五二年末には経済は抗日戦争以前の水準に回復し、一九五三年からは第一次五ヵ年計画が実施され社会主義建設が本格的

に始まることになり、文学芸術界にも新しい状況が現れた。一九五三年九月下旬から十月初めにかけて開催された第二回文代会は、この新しい動きの指標となった。第二回文代会には二つの特徴がある。一つは社会主義リアリズムを文芸創作と批評の最高基準として公式に規定したことである。今日では、一九五〇年代に強調された「政治への服従」が強調されるリアリズムは実はリアリズムからの逸脱であった、という見解が中国でも多数意見となっているが、極左的傾向の強かった建国当初の中国では公式化・概念化の戒めなど積極的な意義をもっていた。もう一つは、社会の安定にともなって専門化が強調されたことである。専門化は芸術の質の向上を意味した。そして第二回文代会前後から、民国期の作品の再評価や外国の名作劇の上演など演劇界には新しい動きが現れていたのである。曹禺が『雷雨』テキストを民国期に戻したのも、このような文芸界、演劇界の民国期作品再評価の空気を感じ取ったからであろう。

『雷雨』は一九五七年六月に五四以来話劇劇本選として中国戯劇出版社から単行本が発行されたが、これも劇本選版に基づくものであった。この単行本『雷雨』には、文化生活出版社版の序文が一部削除³⁵のうえ収録され、四幕話劇とされた。文革終結後の一九八四年一二月に四川人民出版社から刊行された『雷雨』単行本も、この劇本選版に基づく。³⁶劇本選版は、序の有無などから、次のように整理できよう。

Ⅲa、人民文学出版社『曹禺劇本選』（一九五四年六月）

Ⅲb、中国戯劇出版社『雷雨』（一九五七年六月第一版）

Ⅲc、四川人民出版社版『雷雨』（一九八四年一二月）

四

IV、中国戯劇出版社第二版単行本テキスト（一九五九年九月第二版）。『曹禺劇本選』版を圧縮。以下、戯劇二版と略称する。

副題は（四幕話劇）となっている。序幕・尾声はやはり存在しない。作品内容を変更するような修正はないが、第一幕ト書きの四鳳説明部分で、「歩きだすと、育ちすぎた乳房が衣服の下で揺れているのがはっきりわかる」³⁷という部分が削除されているなど、登場人物の性格にかかわる省略もある。魯大海を工頭とする台詞は、劇本選版と同じく訂正されている。第四幕での周樸園から周萍がピストルを渡される場面も、劇本選版と同じである。第四幕の魯大海と周萍の対話は大幅に圧縮されている。作品全体の終わり方は劇本選版と同じである。第二版も第一版と同じく一部削除された序が附されている。

戯劇二版は人民文学出版社版『曹禺選集』（一九六一年五月）に収録され、文革終結直後の一九七八年四月に第三次印刷が刊行された。この『曹禺選集』には『雷雨』序は収録されていない。十数年の空白を経て文革終結後に人々が最初に目にしたテキストである。

戯劇二版は、一九八二年に刊行された北京人民芸術劇院《芸術研究資料》編集組編『《雷雨》の舞台芸術』（上海文芸出版社）³⁸収録の北京人芸演出台詞本（上演台本）と、末尾の部分を除いてト書きなどほぼ同文である。ただし北京人芸上演台本は、戯劇第二版と比べて台詞の一部に更に圧縮、省略がある。『《雷雨》の舞台芸術』収録の北京人芸演出台詞本は末尾に（簾榴整理）と記

され、冒頭には次の整理説明がある。

「本劇は一九五四年の上演時に、戯曲に対していくつか小さな改変をおこなった。その後一九五九年、一九七九年の二回の再演でまた戯曲にいくらか調整をおこなった。この台詞本は一九七九年の上演に基づき整理したものである。」³⁹

『雷雨』は紙幅が長く、文化版を忠実に上演すれば中国語でも五時間近くかかる。そのため、各劇団は多くの場合独自の判断で台詞を削り上演していたと思われる。独自の上演台本作成はかなり大変な作業で、上演に適したテキストが欲しいという声は強かっただろう。戯劇二版は、そのような声に応じて恐らく北京人芸一九五九年上演台本をもとに出版されたと思われる。上演台本の作成者は演出家（北京人芸では夏淳）であるが、北京人芸の院長は曹禺であるから、曹禺の許容範囲を越える改編をおこなうことは考えにくい。

上演台本として使用する場合は問題ないが、『雷雨』を一つの文学作品として鑑賞・研究する場合は、省略本である戯劇二版を用いるのは、やはり適当ではない。これは、中国国内でも文革以前から指摘されていたことである⁴⁰。

五

I d、中国戯劇出版社版『曹禺文集』収録『雷雨』（一九八八年）。

文化大革命終結後に戯劇二版『雷雨』を収録した『曹禺選集』が刊行されたことは、すでに述べた。その後戯劇二版は一九八〇年に中国戯劇出版社から再刊され、上海戯劇学院戯劇文学系選編『中国話劇選』（中国戯劇出版社）などの叢書にも収録され、一九七〇年代末から一九八〇年代前半にかけて、広く普及した。一方で、劇本選版に基づく四川人民出版社版単行本も一九八四年に刊行された。

『雷雨』テキストについては、一九八〇年代後半から変化が現れた。文化版の復活である。

私の知る限りでは、建国後最初の文化版『雷雨』テキスト刊行は、一九八五年一二月刊の『中国新文学大系 一九二七—一九三七』第一六集、戯劇集2（上海文芸出版社）収録のものであった。このシリーズは学術的なもので、どこまで曹禺の意思が働いていたかわからない。より重要なのは、奥付上は一九八八年一二月出版の『曹禺文集』第一巻（中国戯劇出版社）収録『雷雨』が文化版を底本としたことである。「出版説明」で曹禺の承認を受けたことが明記されているからである。『曹禺文集』は、実際には一九九〇年九月出版のようである。⁴¹

この『曹禺文集』出版について、編集に当たった楊景輝が「『曹禺文集』編集始末」⁴²という回想を書いている。楊景輝は中国戯劇出版社副編集長（副総編集）で話劇関係の責任者だった。それによると、曹禺と中国戯劇出版社はなぜか関係がよくなかった。当時曹禺研究者の田本相は、収録作品のすべてが初版に基づく『曹禺文集』の企画をもっており、楊景輝は曹禺との関係回復をめざして田本相の企画を受け入れた。楊景輝は田本相の『曹禺劇作論』（中国戯劇出版社）を編集しており、関係が良好だった。一九八六年二月一〇日に二人で曹禺を訪ね、曹禺は田本相の企画案による『曹禺文集』刊行を承諾した。ところが、あとで曹禺は田本相に電話し、『曹禺文集』には修訂版を入れたいと告げた。この修訂版はおそらく四川人民出版社版（Ⅲc）であろう。やむ

なく中国戯劇出版社は曹禺の意見に従い修訂版で『曹禺文集』編集を始めた。しかし田本相はその後曹禺を訪ね、初版を用いるよう曹禺を説得し、遂に同意させた。この時、修訂版に基づく『曹禺文集』第一巻はすでに校正刷りが出ていたが、楊景輝は中国戯劇出版社指導部に初版による編集し直しを提案した。中国戯劇出版社劉厚生社長、王正編集長は同意したが、劉厚生は曹禺の意思の確証を求めた。そこで田本相は曹禺に「私の文集はすべて“文化生活出版社”の版本に基づき出版することに賛成する」という短い手紙を書いて貰い、ようやく文化版による『文集』出版が確定した。楊景輝の文章には、曹禺の手紙が写真版で掲載されている。『曹禺文集』第一巻巻頭に置かれた『曹禺文集』編集出版説明にはこう記されている。

「本文集の全劇本と著作は、今回の編集の中で初版本または最初に新聞雑誌に発表された底本を採用し、その他の版本を参考にして校訂をおこない、いくつか必要な注釈を付けた。最後に曹禺同志の自らの審訂を経た。」⁴³

田本相がどのように曹禺を説得したのかはわからないが、曹禺自身に文化版出版を認めさせた意義は大きいと言えよう。

今日では、『曹禺文集』第一巻収録テキストだけでなく、人民文学出版社版単行本（一九九四年九月）、花山文芸出版社版『曹禺全集』第一巻収録テキスト（一九九六年七月）などほぼすべての『雷雨』テキストは文化版に基づき、これが『雷雨』定本となっている。曹禺逝去直前刊行の『曹禺全集』も曹禺の確認を受けたことが「前言」で明記されている⁴⁴。過去の改訂テキストは曹禺によって廃棄され、今日では歴史的意義しかもたないとみなしてよい⁴⁵。『雷雨』テキストは、最後に文化版に回帰したのである。

厳密には、『曹禺文集』『曹禺全集』収録テキストは本論第一節でみたように初版ではなく文化版第九版以降のテキストで、冒頭の人物表では魯大海は工頭ではなく工人になっている。また文化版と『文集』『全集』版では景と人物が逆になっていたり、本文の人物が文化版では四、萍のように一字なのに対して、『文集』『全集』版では魯四鳳、周萍とフルネームになっているなど、微細な相違がある。もっともこれらは編集技術の範囲内かもしれない。

なお北京人芸演出台詞本は上演チーム（北京人芸）の意図を文字化したもので、曹禺ではなく北京人芸に属し、事情が異なる。演出台詞本を収録した『《雷雨》の舞台芸術』は、二〇〇七年に中国戯劇出版社より増補版が刊行されている⁴⁶。北京人芸演出台詞本については、北京人芸『雷雨』上演を論じる別の機会に分析することにした。

各節で詳述したように、特に中華人民共和国建国後は、『雷雨』は政治状況の直接間接の影響を受け、テキストは様々に変化した。文化版が定本となった現在の状況は、芸術の自立性を承認するようになった現在の中国の学術文化状況の反映であり、喜ばしいことと言えよう⁴⁷。

注

「 』『 』は日本語文献、《 》は中国語文献。

- ¹ 《曹禺全集》（花山文芸出版社、一九九六年七月）。以下、この注では《曹禺全集》第一巻は全一、第五巻は全五と略して記載。
- ² 廖立《談曹禺対<雷雨>的修改》（《鄭州大学学报》一九六三年第一期、田本相、胡叔和編《曹禺研究資料》中国戯劇出版社、一九九一年収録）。
- 吉田幸夫「曹禺戯劇の修改について」（『樋口進先生古稀記念中国現代文学論集』中国書店、一九九〇年）この論文には「曹禺は本名を万家宝といい、一九〇九年天津に生まれた。（中略）かれは天津で四大名家の一つに数えられる家庭の中で祖母の愛護の下に成長した。」（p271）など不適切な記述がいくつかある。祝宇紅《手槍、銀頂針与“古怪的天意”——從魯大海形象修訂重審《雷雨》作者意図与悲劇性質》（《中国現代文学研究叢刊》二〇二〇年十一月）。
- ³ 胡叔和《曹禺評伝》（中国戯劇出版社、一九九四年一二月）p37。
- ⁴ 田本相《曹禺伝》（北京十月文芸出版社、一九八八年八月）p160。
- ⁵ 《我对于大会的一点意見》、全五p14。
- ⁶ 李春雨《文化生活出版社与中国新文学—兼論巴金的編集出版風格》（《天津師範大学学报(社会科学版)》二〇〇一年二期）などによる。
- ⁷ 《文学季刊》の台詞は同第一巻三期182ページ下段、文化版の台詞は全一p62。
- ⁸ 《文学季刊》第一巻三期177頁下段。
- ⁹ 《文学季刊》第一巻三期222頁上段。このト書自体は文化版でも存在している。
- ¹⁰ これは祝宇紅《手槍、銀頂針与“古怪的天意”——從魯大海形象修訂重審《雷雨》作者意図与悲劇性質》の発見である。ただし『文学季刊』初出（工頭）と文化改訂版（工人）の変更自体は、廖立注2論文、向陽《1935-1936年間<雷雨>在津滬京的演出及其引發的爭議性》（《永生雷雨 曹禺百年誕辰百年國際學術研討會論文集》長江出版社、二〇一一年）で指摘されている。祝宇紅論文は廖立、向陽論文に言及していない。
- ¹¹ 全一p86。
- ¹² ただし、第九版以後も文学叢刊版は発行され、そこでは工頭は工人になっている。筆者が確認したのは民国二八（一九三九）年四月、第十五版。京都大学文学研究科図書館所蔵。文学叢刊版がいつまで刊行されたかは調査中。
- ¹³ 全五p505。
- ¹⁴ 《我对今後創作的初步認識》。この節の記述は瀬戸宏「曹禺作品上演史からみた中華人民共和国50年—『雷雨』を中心に」（『現代中国』七四号、二〇〇〇年）、同「曹禺『雷雨』魯大海の形象について」（『東方学』一四三号、二〇二二年）と論旨が一部重複するところがある。
- ¹⁵ 全五p45。
- ¹⁶ 注15と同。
- ¹⁷ 葉桐《新文学伝播中的開明書店》（《中国現代文学研究叢刊》一九九九年一期）などによる。
- ¹⁸ 開明書店版《曹禺選集》に附された出版広告。
- ¹⁹ 全五p49。
- ²⁰ 注19と同。
- ²¹ 全五p50。
- ²² 開明書店版《曹禺選集》p66。
- ²³ 錢理群《大小舞台之間—曹禺戯劇新論》（浙江文芸出版社、一九九四年）第三章第三節。
- ²⁴ 周揚《論<雷雨>和<日出>—併対黄芝岡先生的批評的批評》（《光明》二卷八期）。
- ²⁵ 注24と同。
- ²⁶ 注24と同。
- ²⁷ 注24と同。
- ²⁸ 注24と同。
- ²⁹ 注24と同。

- ³⁰「我们只听说共匪要掳女人去公。」（《子夜》開明書店初版、一九三四年p12）。
 “我们只听说共产党要掳女人去公。”（《子夜》人民文学出版社、一九五二年第一版、一九七七年第二六次印刷 p14）。なおこの点は中野美代子『中国人の思考様式 小説の世界から』p67（講談社、一九七四年）に指摘がある。
- ³¹ 曹禺《迎春集》（北京出版社 一九五八年）p 135-136。この文は《曹禺全集》未収録。
- ³² 『アジア太平洋討究』No40 二〇二〇年収録。このほか建国初期の知識分子思想改造に関する日本の研究には聶莉莉『「知識分子」の思想的転換 建国初期の潘光旦、費孝通とその周囲』（風響社 二〇一五年）などがある。同書が指摘しているように、建国初期知識分子思想改造に関する研究は、日本では多くない。
- ³³ 田本相《曹禺伝》（北京十月文芸出版社 一九九八年）p366。
- ³⁴ 人民文学出版社《曹禺劇本選》ページ数記載なし。
- ³⁵ 終わり近く序幕・尾声に言及した部分約九百字および日本語訳出版に協力した人物のうち邢振鐸の名が削られている。
- ³⁶ 四川人民出版社版『雷雨』では、文化版の序が人名を戻して収録されたが、序幕・尾声に言及した部分は復活しなかった。本文に序幕・尾声がないからであろう。
- ³⁷ 劇本選版第一幕冒頭の人物説明。文化版にもこの記述がある。
- ³⁸ 《<雷雨>的舞台芸術》。
- ³⁹ 《<雷雨>的舞台芸術》p353。
- ⁴⁰ 廖立《談曹禺对<雷雨>的修改》。
- ⁴¹ 楊景輝《<曹禺文集>編集始末》、楊景輝《中国話劇芸術漫論》（新華書店、二〇一三年）収録。
- ⁴² 注41と同。
- ⁴³ 《曹禺文集》第一卷冒頭（頁記載なし）。
- ⁴⁴ 全一冒頭（頁記載なし）。
- ⁴⁵ 祝宇紅《手槍、銀頂針与“古怪的天意”——從魯大海形象修訂重審《雷雨》作者意図与悲劇性質》は、最後の《雷雨》改訂は一九八四年の四川人民出版社版だと述べているが、筆者は、最後の改訂は《曹禺文集》での文化版への回帰と考える。
- ⁴⁶ 劉章春主編 《<雷雨>的舞台芸術》（中国戲劇出版社 二〇〇七年）。
- ⁴⁷ 劉臻《<雷雨>文本曾大改過六次,是一部漂流于時代的劇作》（《新京報》二〇二〇年一月二四日）によれば、現在北京大学を中心に新しい曹禺全集が編集中であるが、その全貌はまだ明らかになっていない。筆者がみたのは電子版。2022年11月10日最終閲覧。
<https://www.bjnews.com.cn/detail/160871975215594.html>
- なお、曹禺は一九五九年八月の上海人民芸術劇院『雷雨』上演に際して登場人物の階級性を強める方向で再び戯曲を改訂したが、この版は公刊されず見ることができないので、本論の対象とはしない。瀬戸宏「曹禺作品上演史からみた中華人民共和国50年—『雷雨』を中心に」（『現代中国』第七四号、二〇〇〇年参照）。

Abstract

Cao Yu's *Thunderstorm*, published in 1934, is an indicator of the maturity of Chinese spoken drama, and it is the Chinese work that has seen the most performances in the history of spoken drama. From a literary perspective, it is one of the representative works of contemporary Chinese literature. *Thunderstorm* has already undergone minor modifications since the era of the Republic of China. After the founding of the People's Republic of China, several major revisions were made under the influence of the trends of the time. The texts of *Thunderstorm* may be broadly divided into the following:

- I. Culture Life Publishing House's edition (January 1936).
- II. The text of the Kaiming Publishing House edition of Cao Yu's *Selections* (first edition in August 1951).
- III. People's Literature Publishing House's *Cao Yu Drama Selection*, first edition in June 1954.
- IV. Chinese Drama Publishing Company's second edition of the monograph (September 1959, second edition).

There are differences in detail between these lineages. I is now the standard text of *Thunderstorm*. The greatest difference distinguishing I from the other texts is the presence or absence of a prologue and epilogue. II is a text that emphasizes "class struggle" under the influence of the ideological situation immediately after the founding of the People's Republic of China; it has undergone major rewriting in the same way as other modern works. III is an admission of the error of II, consisting basically to a return to the form of I without a prologue or epilogue. IV is an abridgement of III for use as a performance script. In this paper, we analyse the contents of the textual transition from I to IV and the views of Cao Cao, who made the revision, and finally consider the process of returning to I.

(瀬戸宏 撰南大学名誉教授)